

敬頌新禧

皆様方のご健勝と

ご多幸をお祈り申しあげます

平成二十七年 元旦

宮城野書道会

会長 佐藤象雲

役員一同

冬夜読書

管茶山

雪擁山堂樹影深

雪は山堂を擁して 樹影深し

檐鈴不動夜沈沈

檐鈴動かず 夜沈沈

閑収亂帙思疑義

閑かに乱帙を収めて 疑義を思う

一穂青燈萬古心

一穂の青燈 萬古の心

雪が山の草堂に降り積もり、木の影が黒く見える。軒端につるした鈴はことりともせず、夜がしんしんと更けてゆく。心静かに散らかった書籍を片付けつつ、難しい箇所の意味を考える。青いともしびを見つめていると、遠い昔の先哲の心がしだいに明らかになるようだ。

《檐鈴》 軒に吊るした鈴。

《沈沈》 夜が更けるさま。

《帙》 和綴じの本をまとめる今でいうブックケース。

《一穂》 燭台の青い炎が稲の形をしていることから炎を形容する。

管茶山（一七四八—一八二四）は備後（広島県）神辺の生まれで、本名は菅波晋帥すがなみとけのりといましたが、中国の儒学者の多くが一字姓だったことに倣い名字を管としました。号の茶山は生家の北側に見える茶白山（現在の要害山）に由来しています。十九歳のときに京都に出て朱子学や医学を学び名士と交わり、三十四歳の時に故郷に戻り黄葉夕陽村舎を開いて子弟の教育をしました。のちに塾は廉塾れんじゆという名で呼ばれる藩校となって諸藩の学者や文人がこぞつて来訪したと言われます。以前に本欄で紹介した「天草灘に泊す」を詠んだ頼山陽の父春水は友人で、頼山陽は茶山の弟子のひとりです。作詩は宋詩を範として、特に七言絶句に優れ、身辺の事象を的確な観察眼と警抜な着想で詠じて、「東の寛齋（市河世寧）、西の茶山」と称せられました。

この詩は、まさに茶山が学者として自らが冬の夜に静かに読書する心境を詠っています。すつぽりと雪に覆われた草庵に夜がしんしんと更けていきます。そして軒に吊るされた鈴がことりともしない夜更けに、一人静かに本を帙に収めながら今読んだ本の疑問の点を考える儒学者管茶山がそこにいます。この情景に導かれて結句の「一穂の青燈 萬古の心」が輝きます。——ジツと燃える青い炎を仲立ちにして、今読んだ本にあるその昔の学者の心と自分の心が通い合います。まさに読書とは古人との対話です。

この詩が詠まれた年代は資料に乏しく定かではありませんが、学問をすることの楽しみや喜びをお説教的にはなく、言わず語らずのうちに教えていて、いかにも心の中に染み入るような深い趣が感じられます。

牆外数枝の梅 雪を帯びて未だ全くは別たす 斜陽一たび照らし来れば 始めて消えざる雪を餘す



《大意》垣根の外の数本の梅の枝、雪がついているので、雪と花との区別がつかぬ。陽が斜めにさしてきて、やっと消えない雪（梅花）が残った。

(雪中梅・南宮大湫)

祉を肇む



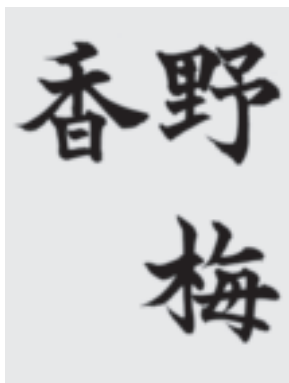
《大意》祉はさいわい。幸福を開きはしめる (陸機)



読み
江路野梅香ばし（川沿いの路には野生の梅の花が香りを放っている・杜甫「西郊」）

江路野
梅香

佐藤象雲書



- ・一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の四字句となります。
- ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字でも構いません。
- ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

江詠聖
梅香

江路野
梅香

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

大者宜
為下

江路聖
梅香

大なる者は宜しく下ることを為すべし

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

		<table border="1"> <tr> <td>支部</td> <td></td> </tr> <tr> <td>順位</td> <td></td> </tr> <tr> <td>氏名</td> <td></td> </tr> </table>	支部		順位		氏名	
支部								
順位								
氏名								

「万葉集」大伴家持

和泉溪石先生書



佐藤象雲書

音

ケンゴウキョケツ
シュシヨウヤコウ

略解

地中より産する鉄で作った名剣を巨闕と称し、
真珠の類で夜も輝く玉を夜光といった。

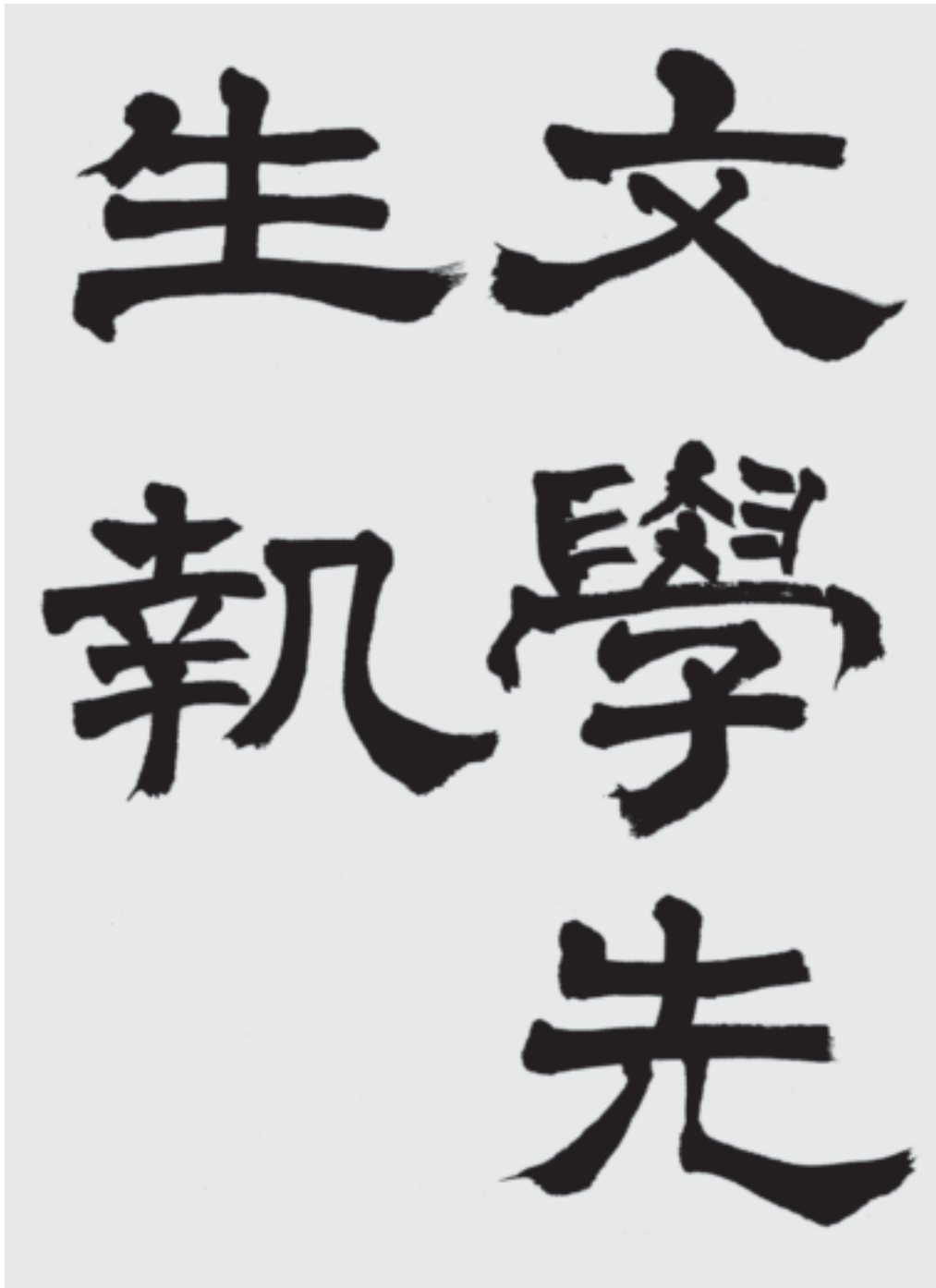
文學先生執

文学先生執(事)……

■ 史晨後碑

(後漢・西暦一六九年)の臨書 (9)

象雲臨



『文学先生執』

隷書は篆書から楷書に至る過渡期の橋渡しの役割を果たした書体といえます。隷書体を見ると篆書とは大分かけ離れて、楷書に比較的近い書体に感じると思います。しかし隷書の勉強を始める場合、先ず注意しなければならぬことは、楷書の筆法で書かないことです。隷書の線は「蚕頭雁尾」などと言われますが、筆画の起筆では蚕の頭のように藏鋒を用いて筆先を線の中に沈め、収筆は雁の尾のように軽く反り返る隷書の主画になる筆法をまず繰り返し学び、楷書の筆法と明確に区別する必要があります。また結体については、いわゆる俗に陥らないように、この史晨碑など法則の備わった漢隷を中心に勉強することが必要です。ぜひ、多くの方に隷書を学んでいただきたいと思えます。



幽情を暢叙(するに足る)

■王羲之・蘭亭序(東晋三五三年頃)の臨書(11)

象雲臨

『暢叙幽情』

王羲之は古くから「書聖」と冠して呼ばれていますが、現在には残された真蹟が一つとして存在しない王羲之の字を如何に学んでいくか?ということは、私たち書学者に課せられた永遠の命題といえます。ここに掲載されている蘭亭序は神龍半印本と呼ばれ、これは褚遂良系のもので馮承素が臨模したものとして伝えられていますが、これも結局は王羲之の残影でしかないと云えます。

王羲之は若いころ衛夫人の書を学び、のちに李斯や鍾繇・蔡邕などを学んだと自らの学書の経緯を述べています。しかし「古法を増損し、今体を裁成す」と唐の張懷瓘が書断のなかで言っているように、王羲之は決して古いものに拘泥せず、新しいものを引き出して新天地を開いています。私たちもただ型だけを真似るようなことはせずに、自らの頭と手を働かせて王羲之の書法を探っていく心構えが必要なのです。